

みんなで考えよう

路面電車のこれから



■市電路線図



昭和の交通を支えてきた路面電車。近年、利用者数の減少などから経営が赤字に転じる一方、車両や工場などの老朽化も進み、持続するには多額の費用が必要となっています。環境に優しく、多くの市民が愛着を感じている路面電車—その“これから”を一緒に考えてみましょう。

内容に関するお問い合わせは、交通企画課 ☎211-2492へ



路面電車の歴史

大正七年に民間会社が営業を開始した路面電車は、昭和二年に市が事業を買取り取り営となりました。

昭和三十年代まで、市街地の拡大とともに路線の延長も図り、昭和三十九年には、円山公園や新琴似、苗穂などを含む九路線、総距離二十五キロ、車両台数は百四十二両と最盛期を迎えました。

しかし、高度成長に伴い自家用車が増加。道路混雑などにより路面電車のスピードが低下し、時間通りの運行が難しくなりました。一方、昭和四十六年には地下鉄南北線北二十四条〜真駒内間が開通したため、市内に張り巡らされていた路線の大部分が廃止されることとなり、昭和四十九年には、現在の路線「西四丁目〜すすきの」間八・五キロを残すのみとなりました。

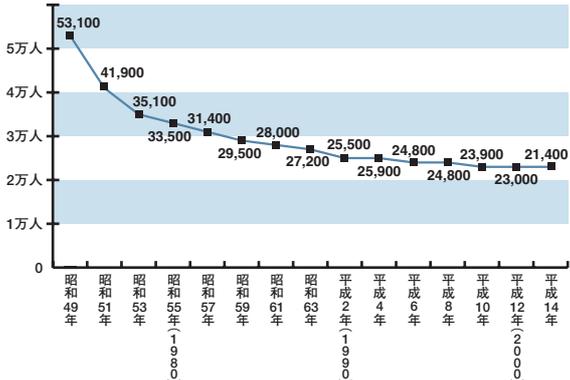
路面電車の現状と問題点

利用者は1日平均2万人

昭和三十年から四十年にかけ、利用者は増加の一途をたどり、昭和三十九年には一日平均二十八万人もの利用がありました。しかし、その後、路線の縮小に伴い利用者が減少。現在は約二万人を数えるほどになっています。

路線の周辺地域では、近年、大規模マンションの建設などで人口が増加に転じているものの、近隣の従業者数の減少や週休二日制の影響などから、年々利用者は減少しています。平成十三年の民間シンクタンクの調査によると、現状の路線のままでは、今後も利用者の増加は見込めない状況です。

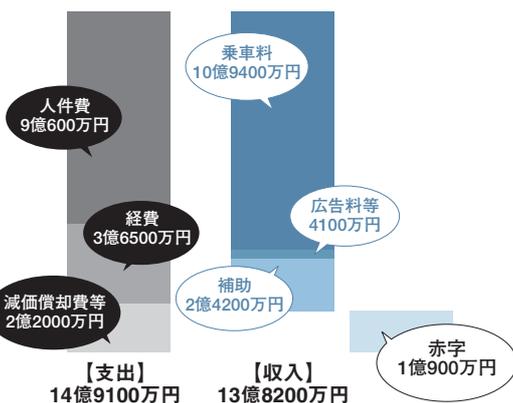
■現状路線での1日当たり利用者数（十の位を四捨五入）



車両、施設の更新に90億円

路面電車の車両は昭和三十年代に作られたものがほとんど。四十年以上使われている車体は、部品を手作りするなど丁寧な整備しているものの、老朽化が進んでおり、早急な更新する必要があります。また、車両の更新だけでなく、整備工場や、レールなどの軌道も改修が必要のため、平成三十二年までに約九十億円の費用が必要になると試算されます。

■路面電車の平成14年度収支



1億一千万円の赤字

乗車料収入だけでは運行経費は賄えていません。平成十四年度決算では、市民の皆さんの税金など二億四千万円を投入しても、一億一千万円の赤字になっています。人件費が支出の六割を占るといった大きな課題があります。